

ザンクト・ガレン修道院における《ハルトムートの大型聖書》プロジェクト — 『創世記』のイニシアル I の装飾を中心に—

龍 真未 (チューリヒ大学)

9 世紀後半、レーゲンスブルクの宮廷に従事し不在が多かった修道院長グリマルト (在位 841-872) の代理として、現在スイス東北部に位置するザンクト・ガレン修道院を統轄したのは、当時首席修道士であり、後に修道院長を引き継ぐハルトムート (在位 872-883) であった。ハルトムートは代理時代、グリマルトのために大型聖書と小型聖書の連作をスクリプトリウムに注文しており、そのうち一連の大型聖書については、現在 6 点の写本 (ザンクト・ガレン修道院図書館 Cod. Sang. 77, 78, 79, 81, 82, 83) (以下、本連作) が特定されている。

本連作に関しては、聖書学研究者ベルジュによるトゥール由来の一巻本聖書 (同図書館 Cod. Sang. 75) との関係の指摘 (1893) や美術史学者マートンによるザンクト・ガレン修道院の写本群のイニシアル芸術の発展における様式的考察 (11912, 21923) が現在も基礎研究として受容されるものの、ハルトムート関連作品では、貴重な紫を贅沢に用いた修道院長時代の《フォルヒャルト詩篇》(同図書館 Cod. Sang. 23) ばかりが注目されてきた。同修道院の初期中世写本芸術作品をまとめたフォン・オウヴ (2008) も、聖書写本プロジェクトの重要性を再考する一方、他の多くの写本との関係叙述を主眼に置いており、作品自体の詳細な分析は十分にはなされていない。本発表は、大型聖書 6 点の文字装飾の造形分析を行うことで、ザンクト・ガレン修道院が生み出した彩飾写本におけるハルトムートのプロジェクトの位置づけを再考するものである。

制作プロジェクトのモデルとしては、テキストの段組みの数や装飾イニシアルの位置といった形式的な観点から、トゥールからザンクト・ガレンに持ち込まれた旧新約聖書を含む大型の一巻本聖書が想定される。しかし造形的に見れば、本連作のイニシアルは、一巻本聖書における、黒インクで形作られたシンプルな装飾とは一線を画す。本連作 6 点の写本では、色彩の種類は異なるが、いずれも朱色のミニウムでイニシアルが線描され、その造形は従来の魚や獣モチーフと調和するものなど様々である。なかでも『創世記』の冒頭を飾るイニシアル I は、一巻本聖書の植物装飾の意匠を残すものの、線描に煌びやかさを与える金・銀が被せられ、さらに繊細な幾何学模様が内側に埋め込まれることでより強い存在感を放つ。制作背景に当時の修道院のアイランドへの傾倒も考慮することで、本連作のイニシアル装飾には、ザンクト・ガレンが 9 世紀後期までにイニシアル芸術の頂点を極めるに至るまでの造形の過程が内包されているといえる。

ザンクト・ガレン修道院の造形芸術の開花は、文字装飾の発展の中にある。近隣のラエティア文化やロンバルディア文化を基礎としながら、島嶼系様式を吸収し、そこに宮廷のカロリング文化を混ぜることで独自の様式を完成させるに至ったのがハルトムート時代の写本芸術であり、その先駆的な例が《ハルトムートの大型聖書》であったと結論付けられる。